

1 活動名 ききあおう
2 活動について

サークル対話は、低学年教育の中心的な活動の一つで、特に1年生では、朝から帰りまでの様々な場面で行われるものである。教室にベンチと牛乳パック椅子を準備し、子どもたちの手でそれを並べ、一つの輪になって座る。サークルに集まると、健康観察や学習、クラスで起きた問題について、学習の振り返りなど様々なことを話し合っている。本時で行うサークル対話は、子どもたちは「つたえる」という名称で、普段は朝行っているもので、生活の中で見つけたことや感じたこと、興味をもったことなどを語り合い、聴き合う学習活動である。4月頃は、話したいことがある子は全員発表し、一人ひとりの発表を質問がなくなるまでずっと続けた。当然、最初は熱心に聞き質問も活発だが時間もそれなりにかかり、だれてくる。その経験から子どもたちも、もう少し短くしないと大変だということに気が付き、質問する人数や発表者数の試行錯誤を経て、現在は(発表6人、発表時間1人5分)に落ち着いている。

発表は、最初は「ひまわりを育てています」のような発表だった。それに対して「どこで買ったんですか」「大事に育てていますか」といった質問から、「ひまわりの種は食べたことがありますか」「相棒はいまですか(4~5月に流行った)」のような質問まで、内容を深めるもの、自分が聞きたいことをきくものと様々であった。発表の後半は集中力が切れることがあったが、「友だちの話をきくこと」と、教師も積極的に質問しながら、「こういうことを聞くといい」ことを感じられるように意識してかかわった。

5月中旬から、「つたえる」で話された発表を最後に振り返る活動を始めた。思ったよりも内容は覚えていたが、まだ聞くことが苦手な子は他の子の発言で内容を思い出していたが、続けていくと発表をよく聴くようになり、内容を覚えている子が増えてきた。

5月下旬、ひらがなの学習をもくれんの「も」から始めた。Nさんが、登校途中に附属幼稚園の前に落ちていた木蓮を拾ってきて見せてくれた発表だった。子どもたちは国語のノートを開き、Nさんが拾ってきた木蓮を観察しながら思い思いに木蓮描き、その横に大きく「もくれん」と書く。このように、サークル対話の話題から文字の学習を積み重ねていくと、もっとくわしく書きたいという想いを子どもたちがもつようになり、文章で表すようになってくる。このように「自分が話したことが文になる」ことは、子どもたちにとって書き表すことの大きな動機づけとなる。そうすると、子どもの発表が劇的に変わり、話し手は聴き手に伝える意識をもって話そうとし、聴き手も自分の経験と重ね合わせながら話を聴こうとするようになる。このように、サークル対話とその後のことばの学びを通して、話すことと書くことが同時に学ばれていき、少しずつ語られることばや表現が豊かになっていく。

この学びの原動力は、自分たちの経験や知識が生かされ、学びにつながっているという意識を子どもたちがもっていることである。また、このサークル対話はことばの学びだけでなく、プロジェクト的な学びや自然の探索など様々な学習や活動に生かされていく、教室の中心的な活動になっている。

3 学習指導計画(帯単元 3学期14時間目/全20時間) ※毎時間のおおよその流れ

- サークル対話で、1人5分程度、6人の発表を行う(5分に質問や感想の交流も含む)。
- サークル対話で出された話題について、振り返る。
- サークル対話の話題で、良かったと思うものを1つ選ぶ(子どもは複数投票できる)。
- (時間が残った場合は)選んだ発表を板書し、共同推敲する。できあがった文章はノートに視写する。

4 本時の学習について

(1) 本時のねらい

- 聴き手を意識して発表する。発表する子の伝えたいことを分かろうとしながら聴き共同推敲に生かす。

(2) 予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
1 サークル対話で発表を聴きあう	○教師も子どもも発表を楽しむ。 ・話し手の伝えたいことに寄り添いながら聴き、応答できるよう配慮する。 ・子どものことばが、とがったものにならないよう気を配る。 ・必要に応じて、語義の共有や場面を想像するための支援をする。
2 発表を振り返る	○発表内容を1つずつ振り返り、内容を思い出す。
3 発表から題材を1つ選ぶ	○子どもたちが気に入ったものを複数投票しながら、題材を選ぶ。
4 選ばれた題材を共同推敲する	○発表者の表したいことに寄り添うことを大切にして推敲する。 ○推敲するポイントを整理しながら進める。

□授業後の話し合いで話題にしたいこと

サークル対話や共同推敲が、ことばの学びを通した「てつがく」の学びとなっているか。